

# 横芝の碑 (その六十)

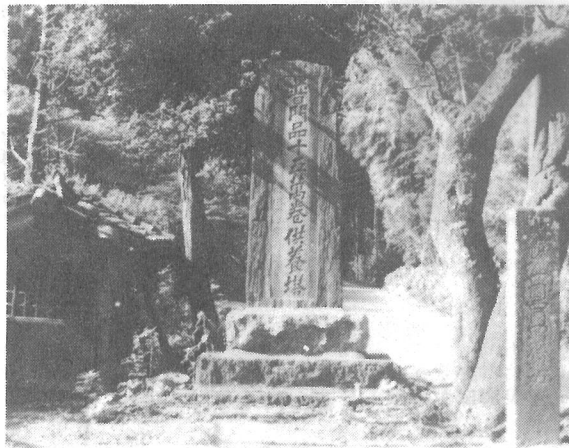
## 追分の昔を語る二基の碑

横芝町指定文化財の第一号は、木戸台町原地区の稻荷神社境内の乳銀杏です。ここは昔寺院の建っていた跡といわれていますが、道路を距てた真向いの一隅も寺院の敷地であったという話です。その関係なのでしようか其処には石仏、札所のお堂、普門品供養塔、順礼回期供養碑が立ち並んでいます。

普門品供養塔は上町の石合山大師堂を開基された町原の吉岡宗治郎さんが発願人になられて建立されたものといわれ、表面には、普門品十五万巻供養塔、大僧正田中照心圓圖。裏面には、白浜、匠磋須賀、蓮沼、睦岡等、十数ヶ町村に及ぶ善男善女三百名余の氏名が出身町村別に刻まれています。

普門品供養は、普門品経文の一卷を唱名する毎に一供養が済む、ということになるのだそうです。十五万巻供養といえますと、仮に裏面に刻まれている人々が一念発願に全員参加されたとしても、一人五百回の唱名を果さなければ念願は成就されなかつた訳で、特に十数箇町村に跨る広い地域の皆さんですから大変でした。皆さんはお互いに連絡をとり合い、若し仲

間の中で病氣又は旅行等で唱名が不可能な場合は、誰かがその分の唱名を行ない、又唱名の度数を誤



らない様にと、袂の中に構寸の軸を入れて確認をする等をして、漸く念願成就を果したということですよ。

さて、その喜びを記念し、衆生済度の供養塔を建立することになった時、発願人の吉岡さんの頭には、すぐに順礼回期供養の隣が浮びました。その頃、此処には枝振りも見事な老松と、樹令を誇る桜

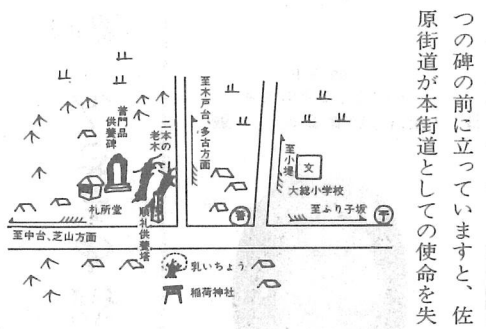
の大樹が四季折々の風情を見せていましたし、また、今では農用の路位にしか考えられていないこの道路が、昔は、多古を経て佐原方面に通ずる本街道になっていた、謂はば、此処は本街の追分になっていたのです。従って昔は人馬の往来も繁く、来る者、往く者、離れる者、此処を通過した人々の思いがこもった場所だった訳です。その人々の後生安樂の祈願も併せて此の場所を選んだという話です。

普門品供養碑建立場所の目安になったという順礼回期供養碑は、稍々軟質石材の角柱状で、表には奉順礼四国西国回期供養碑、坂田方面寄の面には、東、さかた、よこしば、浜道、中台方面寄の面には、西、〇柴山、さくら、江戸道、そして裏面には、北、木戸台、多古、さ原道、と刻まれています。

表面の文字は、判りて読みとれませんが、道しるべの文字は漸く判読できる程に朽ち欠けていますが、ここが追分、佐原へ通ずる本街道であったことを伝える、極めて大切な碑といえる訳です。

◎写真は、普門品十五万巻供養塔(中央)と道しるべを兼ねた奉順礼四国西国回期供養碑(向って右)で、格子戸の嵌った小さな建物が札所のお堂で、更に左奥には明和五年二月、十九夜講中と刻まれた石像が建っています。

順礼供養碑の後は、二本の朽ちかけた老幹が見えています。しかし、美事な枝振りや爛漫と咲き誇った花の春は語草となって残るだけです。老幹の下を通って普門品供養碑の後の方へ白く光って続いているのが昔の佐原街道です。今、追分の昔を偲びながら、二つの碑の前に立っていますと、佐原街道が本街道としての使命を失



い、追分の道しるべとなっていた四国西国順礼供養碑も、朽ち欠けて消えて行く文字と共に道しるべの善意は忘れられてしまふであろうこと。そして、前に取材した石合山開基の吉岡宗治郎さんのお名

前に再びお目に掛ったこと等を思い併せ、暫らくは立ち去り難い感傷に陥るのでした。(本校取材に当り、前大総郵便局長吉岡常二氏他の方々の御指導と御協力を戴いたことを申添えます)文化財審議会委員 小沢春光氏寄稿

## 町民文化祭を前に

### 青年団

青年団では、青年教室をはじめ、各自で文化祭の準備、バザーおよび美術展の作品づくりをおこなっています。

毎月第三土曜の夜、多数の団員が集まって、十一月三日から六日までおこなわれる予定の文化祭に備えて、リボンフラワー、ペーパーフラワー造りを公民館の視聴覚室を借りておこなっています。

若者よ。秋の夜長を我々団員といっしょに過ごしてみませんか？

お問合せは 横芝町青年団長 藤ノ木茂 (☎2-3116)まで

